



No. 89

発行人 染野 貴寛
発行所 一般社団法人 千葉県社会福祉士会
〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港7-1
塚本千葉第5ビル3F
TEL043-238-2866
FAX043-238-2867
<http://www.cswchiba.com/>
E-mail: office@cswhiba.com

※ 点と線はメール配信でも読めます！



子曰わく『歳寒くして然る後に、松柏の後凋（こうちょう）を知る』
春に艶やかに咲き誇り、人々を魅了する桜のようにはいかなくとも、
夏に繁茂する彩色豊かな草花のように、優雅な香りを醸すこともなく、
秋の紅葉のように美しく街を染めてこぼれ落ちる情緒を演出することはできなくとも、
力強く大地に根を張り、いつの季節も青く、雄大にいきいきと存在する大樹のように。
親から子へと、私たちから地域へと、福祉の種は紡がれながら、いずれ大樹が育つのでしょうか。
私たちの蒔いた福祉の種は10年後、50年後、どんな樹に育つのでしょうか？

- 2 《特集1》 「福祉を伝える」
- 5 《特集2》 「生活困窮者自立支援法を語ろう」
- 7 千葉県社会福祉士会オープン化への取り組み
- 8 社会福祉士のわ
- 9 活動紹介「広報部会」
- 10 日本社会福祉士会 全国大会レポート
- 12 事務局便り

特集① 福祉を伝える

社会福祉法人つくばね会

理事長 石橋 誠

「いしばし まこと」



つくばね会は、小規模福祉作業所から平成十六年に我孫子市の土地をお借りし法定の事業所に。設立当初から、地域、我孫子市全体の福祉の向上を掲げてまいりました。具体的な一つが、施設の開放。障害者のサークルは無料で、町内会の会合には低料でお貸ししています。近隣の二つの町内会の役員会、防災、ボランティア等の会議

が当施設で行われています。平均週に一度は利用してくれています。

法人も十年経過し、更なる地域貢献を念頭に、国が「社会福祉法人の在り方検討委員会」を立ち上げたのと並行し、「つくばね会在り方検討委員会」を作り、職員、理事、評議員有志で検討。その結果の一つに「子ども（特に貧困）の支援」があり、我孫子自主夜間中学とコラボし八月「夜間中学湖北駅前教室」を開所。その開所式の場で今回のこの原稿の依頼を受けました。テーマが「福祉を伝える」。

「ベテランから福祉を伝える」とはおこがましいですし、伝えるというより「作る」ものだと思います。職員に「法人の理念は（守る）ものでなく、職員自らが（作る）もの。」だと話しています。十年を経過に設立当初作成した「倫理綱領」を再検討。職員で一年弱

検討を重ね「新倫理綱領」を作成。

それで終わりではなく、それを守ると同時に、他の視点はないか、絶えず作り上げる姿勢が大切だと思います。国連障害者権利条約にしても今の人間が決めていること。普遍的真理は存在しません。だからこそ、これからの福祉を担う若者たちが作り上げていく必要があります。

依頼の文書に「福祉とは何か」とありました。法人の目的が地域、社会の福祉向上と書きましたが第一義的には利用者に対する福祉サービスの提供、ニーズに応えることとです。

若い時ですが、福祉の仕事に従事しあれこれ模索する中で、はっと思い当たった言葉がありました。以前に読んだ「星の王子様」の「愛とは互いが向き合い見つめ合うこととでなく、同じ方向を見ることが。そうか、利用者との関係、あるいは福祉とはそういうことなのか。いや、むしろ福祉にこそぴったりの言葉だと。利用者として向き合い、本人を知り、課題

を知り、力を伸ばすことは重要です。それ自体が難しい課題。障害者総合支援法の三年目の見直しを論議している社会保障審議会での論点の一つであり、且つ権利条約に関する政府報告検討の障害者政策委員会での論点の一つである「意思決定支援」の議論をみても永遠のテーマだと思います。利用者に向き合う、それも重要ですが、もっと大切なことは利用者の横に立ち、同じ方向に向かって歩き出すことこそではないかと。

「幸せ」とは、幸せを追い求める行為とも言います。福祉＝幸せなら同じこと。利用者と一緒に、その横には親、職員、行政の職員もいます。皆が一行でなく横並びで、「人間って何？」「生きるって何？」「福祉って何？」と考えながら歩いていく。そんなイメージが「福祉」だと思います。

市川市社会福祉協議会

山口 光太郎

「やまぐち こうたろう」



いちかわ社協が取り組む

「福祉きょういく」

「教育」と「共育」・「協育」

市川市社会福祉協議会（以下「いちかわ社協」）では、一般に称される「福祉教育」を「福祉きょういく」と表している。それは、「きょういく」には、「教え、育てる」という意味だけでなく、「共に」そして「協力して」育ちあい、成長していく」という意味もあると考えるからである。この視点からすると、「地域で安心して暮らし続

けていく」ことを目的とする社会福祉協議会（以下「社協」）の取り組みは、全て「福祉きょういく」につながると言える。

「総合的な学習の時間」と「福祉」

いちかわ社協では、地域福祉推進事業をはじめ様々な事業に取り組んでいる。その中でも特に「福祉きょういく」の象徴的なものとして「小・中学校への総合的な学習の時間への支援」が挙げられる。福祉の分野において、車イスやアイマスクを使用した体験学習の講師やボランティアに関する講演、また関係者や当事者等の講師派遣に関する相談などが主な内容となる。そもそも「総合的な学習の時間」は、福祉分野を学ぶための時間ではなく様々なテーマが挙げられ、どのテーマを取り上げるのかは学校によって異なってくる。一方で、小学校と中学校とで学区域が異なる状況もあるため、小学校と中学校でそれぞれ福祉をテーマにした「総合的な学習」を受けるケースもあれば、在学中九年間に

福祉を学ぶ機会が一切ないケースも起こりうる。

「子どもの育ち」に応じた「体験学習」とは…？

また、体験学習に携わる際の課題として、各発達段階において、学習目標をどこに設定するかということも挙げられる。例えば、車イスを使用した体験学習を行うにあたり、小学校四年生と中学校三年生とでは、児童・生徒が感じることは違い、また学習の先にある期待も異なっており、然るべきであるが、授業内容は全く変わらず…ということも多い。事前に学校（担当の先生）と授業計画や学習目標についての確認は行うが、学校によって「福祉」に対する熱意も違えば授業計画・目標も様々であり、「とりあえずメニューをこなす」という風潮も否めないとある。今後、いちかわ社協としても提供できることのカードを改めて見直しつつ、一担当・一学校だけではなく市域全体として「総合的な学習の時間」における「福祉」

をどのように捉えいくのかを共有認識していくことが求められる。

「共育ち」を紡ぐ先に…

現在、いちかわ社協では、小・中学校から体験学習等の依頼があった際、可能な限り地区社協（その地域にお住まいの住民）や近隣の福祉関係機関にも参画してもらうことを意識している。子どもたちにとって「よく知らない大人」が伝えるのではなく、同じ地域に住む信頼できる大人たちと「共育ち」をしていくことが、これからの「福祉きょういく」に大きく広がっていくと考えるからである。私は、社協の役割は、いろいろな「つながり」を紡ぎ・育むことだと捉えている。「総合的な学習の時間」を含めたいちかわ社協の取り組みが、一時の体験で終わってしまうのではなく、「今後」や「未来」へつながる「機会」になりうるよう、働きかけを積み重ねていきたい。

麗澤大学地域連携センター

砂川 亜里沙

「すながわ ありさ」



大学の役割として教育・研究に並び社会貢献が教育基本法に明示されるようになり、平成二五年度からは高等教育機関が地域コミュニティの核となるような全学的な取り組みに対して助成を行う国の C O C 事業（地（知）の拠点整備事業）も始まりました。様々な社会的課題を解決するために、大学の持つ知的資源を社会に積極的に活用することが求められてきています。こうした流れの中、本学では地元の柏市、柏商工会議所、協同組合光ヶ丘商店会と締結している

包括的連携協定に基づき、地域の多主体交流を図るフリーマーケットや音楽祭などのイベントをはじめ、様々な地域連携事業を展開してきました。東葛近隣市に立地する大学が加盟するコンソーシアムでは地域課題に対して学生がアイデア提案する取り組みもあり、本学で泊まり込みのワークショップも行ったことがあります。そのような学生・教職員の特技や研究分野を活かし、地域関係者と連携した活動が段々と広がりを持ち、学外からの連携企画の打診も増加してきたことから、本学の社会貢献活動の体制を整えるべく、平成二七年四月に地域連携センターが発足しました。センター発足後は大学間連携の震災復興ボランティアへの学生派遣や学生によるボランティアセンターの活動支援など社会福祉的活動が活発化したことから、地域社会福祉協議会と大学との連携も育ちはじめています。学びを地域課題解決の実践に生かす教育手法であるサービスマーケティングの講義では、ボランティア先

の紹介や講義講師も担当いただきました。

大学が持つ大きな知的資源は人材ですが、教職員・学生だけでなく生涯学習講座の受講生など経験や特技も多様です。また地域課題への関心度も異なるため、一様に社会活動を勧めても期待した成果は見込めません。しかし、彼ら個々人の興味に合った企画や情報提供、多様な地域人材と出会う場がある、主体的に課題や活動に取り組むようになります。そのような経験は学生達にとって、学内だけでは得られない社会人としての素養や道徳、多様な人がいる社会を受け止める広い視野を築くための貴重な機会です。真のグローバル人材とは語学力が長けているだけでなく、相手の気持ちを思いやる想像力や物事に対する行動力がある人物です。そうした力を培う実践の舞台が地域であり、地域と協働する機会を創っていくことは、大学の個性も出る重要な取り組みと言えます。

学内では英語教職課程履修学生

の有志によって近隣中学校の学習支援ボランティアが立ち上がりました。また、ボランティア活動の啓発や子どもの居場所づくりに取り組みんでいるサークルもあります。障がい者や社会的マイノリティを抱える人に対する偏見を減らし、相互理解を深めることを目的とした『ヒューマンライブラリー』の取り組みを、地域イベントとして試みるゼミもあります。社会福祉のプロではない彼らですが、地域の方々のご協力をいただきながら活動に取り組み、悩みながらも進んでいます。そのような学生たちの姿が同年代や子どもたちのロールモデルとなり、多様性を許容するまちの素地となることを期待しています。動き始めたばかりの当センターですが、地域交流活動はもとより、正課の授業においても、地域社会への多様な関わり方を用意することで、勇気を出して始めようとする学生たちの背中を押し、社会が抱える問題を自分事として捉えるきっかけづくりに繋がればと願っています。

特集2 「生活困窮者自立支援法を語ろう」

対談者

川崎 保規（かわさきやすき）さん
 渋沢 茂（しぶさわしげる）さん
 松本 拓馬（まつもとたくま）さん

―前号の特集、

【生活困窮者自立支援法を知る】

を読んだ会員の川崎さんから、この新しい制度の本質が十分に伝わっていないのではないか、というご意見をいただきました。これまでも広報部会では、『点と線』を読んでも「こうじゃないの?」と意見をいただき、それに対して紙面で反応する双方向の交流が生まれることを望んできました。

今回、川崎さんよりいただいたご意見を一読者の意見として終わらせずに、それをさらに深める目的で、前号でご寄稿いただいた渋沢さんと松本さんに改めて依頼をし、川崎さんと三名での座談会を

開催しました。その内容を今号の特集としています。

川崎 生活困窮者支援事業の法

の精神・原理はなにか。そこに社会福祉士がどのような関わっていくかを話し合

っていききたい。この制度の特徴としてバイステイックが一番にあげている個性がうたわれ、その人自身に

フオーカスをあてている。

また、単に経済生活困窮者のみに対象者を絞っていないのも大きな特徴だと考えている。その中の一つのキーワードとして「孤立」の問題がある。

松本

「孤立」は「自立」とまったく正反対の概念と言えます。支援をする側、される側という限定的な見方は、

渋沢

自己肯定感を損なう恐れがあり、孤立を招く結果になりかねません。相互に支え合う関係が大切なんです。支援をされる側と見られて

いる人たちが地域の中で力を発揮できるようなアプローチと視点が必要です。自

らが「価値のある存在だと感じられる」ことが重要と

考えています。

人口十五万人の都市で中

核支援センターをしながらこの事業を担当している。

中核支援センターは武器も権限もない。関係をつくる

ことが大変で大切。今回の

自立相談は混沌とするかと思

ったが、明確に目的をも

って相談に来る方が多い。

また、僕たちも住宅給付の

窓口になる、社協の貸し付

けのプランをたてる等の武

器があるという意味では、

中核センター事業とは違う

なと思う。そこに引きずら

れないようにしなければと

松本

思う。

中核支援センターは「純粹なソーシャルワークを追及している」と前号で渋沢さんが語られていました。

まさに武器を持たないソーシャルワークですね。注目したいのはアウトリーチの仕方。「困っている」という意識のない人にどうやってソーシャルワークを展開させていくかでしょう。

渋沢

茂原は半分都市型で半分農村型の社会だと感じている。困ったら市役所に行く方が多い。民生委員もしっかり地域を把握されている。僕たちに必要なのはそういう地域の人に近づいていくことなのではないかと思う。





松本

地域に埋もれた「困った」

の声を発見できる目を増やすために、関係機関に周知をしていくこともアウトリーチですね。

川崎

地域特性に合わせることをこの制度は明確に出している。発想はよいと思う。

松本

今までの制度は申請主義が基本だった。この制度の醍醐味は「困ったけど言えない人」「困ったことに気づいてない人」そこにおせっかいをしにいくこと。支援対象を限定してしまうと支援の網から零れ落ちる人たちが出てくる。だから線引きをしない。そこに意識をもっていくのに苦労した。

川崎

理想論ですが。同行訪問してくれと言われた時には絶対に断らないようにしている。一見支援に関係ないようなことにもなにか主訴が隠れているかもしれない。本人の主訴がどこに出てくるかを探っていくのは面白い。

洪沢

アセスメントをどう進めていくかはいかにも社会福祉士。これからは問題を複数抱えた対象者が増える。いろいろな知識が要求される。

松本

全部を完璧に知るの無理だけど、人に頼っていくことも大事だね。横の関係だけでなく、縦の関係も見必要があると思う。貧困の連鎖みたいなものもあり、そういうことって大事だと思う。こういう課題って一発で決まるってことってそうないじゃないですか。問題を抱えている方と関わっていく中で、その方の

マイナス面だけでなく、プラス面を引き出すことができないかなって。まずは、

個人のストレスと家族のストレス、そして地域という視点が持てればと思います。結果に目を向けるとうまくいかないことが多いですね。「結果オーライは、本当にオーライか？」

ということなんです。結果どうなったかよりも、本人がどう決定するに至ったか。そのプロセスが大事だと思

川崎

っている。そこを本人と一緒に考え、揺れることだと思っ

洪沢

千葉市とか、規模も大きいし、大変ですよ。十五万人の都市だとなんとなく見渡せる感じはある。

川崎

支援される側も支援する側になるというかたちでの地域づくりも必要。

松本

地域の人々を巻き込んで、この地域をどうしていきたいかを考えていくことが難



とが大事。

松本

これまでは、稼働年齢層に対する支援策がすっぱりと抜け落ちていたように思う。今回の制度でやっと若い人にもスポットが当てられた。

この制度でよく感じたのが、会議のあり方って大事なこと。いかに幅広く意見を抽出していけるかがカギとなる。些細なアイデアから地域づくりがすすんでいく。

渋沢

僕は、マイノリティの方の暮らしに付き合わせていただきたいと思っています。今はそれが必要なのではないかな？

松本

マイノリティは、適応のしづらさにより孤立に陥りやすい。マイノリティがいてあたりまえの社会。だからすべての人にとって生きやすい地域を作らないといけない。

川崎

多くの社会福祉士はこの



制度に関わっていない人がほとんどだが、そういう人にもこの制度を正確に知ってもらいたい。社会福祉士であれば関心を持ってもらいたい。

―対談を通じて、この制度へのかかり方を議論したなかで見えてきたソーシャルワークのあり方、社会福祉士としての立ち位置について改めて考えさせていただきました。また、この制度を社会福祉士が知っておくべきこと、経済的困窮者のみを対象としているものではないことなど、様々な意見が交わされました。今後もこのようなたちで相互交流したものを紙面に残していければと思います。

千葉県社会福祉士会

活動のオープン化に向けて動き出しています！

千葉県社会福祉士会（以下、会）に入会したけれども、具体的にどんな活動をしているのか分からない、という声をよく耳にします。

会では様々な委員会活動が行われています。しかし、会に入り何が出来るとか胸を躍らせている多くの会員にとって、それぞれの委員会がどんな活動を行っている、どうやって参加したらいいのか見えにくいことが、会の活動の活発化を停滞させている一因なのではないでしょうか。

一方で、会の活動に参加しているメンバーからは、活動を通じてつながったネットワークが仕事でも活かされた、信頼できる仲間が見つかった、という声も聞こえています。

そこで、どうしたらもっと活動

に参加しやすくなるのか、新しい活動を企画・実践するにはどうすればいいのか、そんなことをざっくばらんに話し合う場所を作りました。誰でも初めの一步を踏み出すのは勇気のいることです。でも、みんなが一つの目的に向けて同じ立場で話し合う、否定するのではなくどうしたら出来るかを考える、そんな場があることが、会にとってもオープン化への第一歩になるのだと考えています。

その場に参加できなくても、意見をいただくだけでも結構です。まず、会のホームページにて「千葉県社会福祉士会オープン化についての話し合いについて」をご確認ください。みなさまの初めの一步、お待ちしております。

社会福祉士の わ

君津市役所

渡辺 由郁子（わたなべ ゆかこ）

☆まずは自己紹介☆

茨城県生まれ。大学卒業後、介護福祉士として茨城県内の特別養護老人ホームで勤務。結婚後千葉市へ転居し、市原市の直営地域包括センターの嘱託職員として勤務。長女を出産し木更津市へ転居。病院のソーシャルワーカーとして勤務後、現在は君津市役所に在籍。今年三月まで直営地域包括支援センターで勤務し、四月に障害福祉課へ異動。第三子妊娠し現在は休職中で現場経験年数も浅いですが、これから学びを深めて仲間づくりもしていきたいと思っています。社会福祉士です。

☆社会福祉士との出会い☆

高校生で看護師になりたいと思って医療に興味を持ちました。大学受験の小論文対策で初めて社会福

祉士という資格を知りました。どんな職業なのか調べる中で、相手の生活、人生に関わり手助けできる仕事に惹かれ、目指し出したのが出発点です。介護保険制度が始まって間もない頃でした。

☆実際仕事をしてみて思うこと☆

市役所での社会福祉士の仕事は高齢者、児童、障害等といった様々な分野を超えて幅広い知識が必要であることを実感しました。虐待等緊急性の高いケース、家族各々が問題を抱えるケース、近隣住民や民生委員等から寄せられる相談では当事者に問題意識がないことも少なくありません。様々なケースにぶつかの中で自分の力不足を感じ、知識の向上と援助技術を磨いていく必要性を感じました。相手から学ぶことも多くあります。

資格を持つているだけではなく常に学び続けることの必要性を痛感したことが、基礎研修受講のきっかけになりました。優しさだけでは何も解決できず、知識、技術、実行力、様々なことが実践に求められま

す。その人その人で生き方や価値観が違い、パターン化できないところが仕事をしていて難しくもあり、社会福祉士として働く魅力ではないかと感じます。

支援していく中で相手との距離感をうまく図ることができ、本人自身が糸口を見つけた際の嬉しさがやりがいにつながっています。

☆研修について思うこと☆

今年度、基礎研修Ⅱを受講していましたが途中で研修に通うことが難しくなり、来年度に全課程修了を目指す予定です。研修はスキルアップの場であると共に出会いの場でもあることが新鮮です。大学時代は同じ資格を目指す友人がすぐ側にいたこと、意見を聞ける先生が身近にいたことで、熱い思いを維持することはできていました。現在は「社会福祉士って何」というところから説明が必要なことも多く、「専門的な技術は目に見えにくいのだな」と感じることもあり、モチベーションが下がることもあります。そんな中

で仲間との出会い、そこから得る刺激は大きいものです。

☆今後の目標☆

まだまだ経験も浅く未熟者ではありますが、少しずつ地域福祉の底上げに力を注いでいきたいです。制度の限界を感じることもあります。制ことで補うこと、解決できることもあります。人とのつながり、ネットワークはとても重要で「宝である」と感じています。今後も日々の出会い一つひとつを大切にしていきたいと考えています。また、社会福祉士をもっと社会に知ってもらえたらと考えています。皆様、今後ともよろしくお願い致します。



活動紹介「広報部会」

千葉県社会福祉士会

広報部会員 山口 利史

活動内容

ホームページの維持・管理・会のパンフレット作成などを行っています。活動の中心は、年三回の「点と線」の発行です。

活動の楽しさ

広報部会の活動の良さは、共に行う作業が多いところにあります。仲間と意見をぶつけ合える編集会議、自らのネットワークを耕せる取材や執筆依頼、記事を人より早く楽しむことができる編集・校正作業、肩を並べ、完成品を封詰めしながら映画や音楽の話で盛り上がるなどゆつくり楽しめる発送作業があります。

活動風景

活動の中心となる「点と線」の発行までの流れを紹介します。

★編集会議（発行四ヶ月前）

その時々で仕事で出られない仲間もいますが、毎回、七、八名が集まります。十二頁の紙面に特集記事、トピックスをどのようなテーマにするか、新たな企画がないか議論します。仲間は、多様な分野から集まっており、お互いの話の深掘りは面白い！社会福祉士としての知的好奇心がここで発揮されます。そこでの盛り上がりが集やトピックスに活かされます。

★原稿執筆（発行四〜一カ月前）

自分達が執筆する記事ももちろんありますが、それだけではありません。点と線の執筆依頼として、聞いてみたかったことを初めて話す人に尋ねることもできます。仕事の中で得がたい経験もできます。今回のように座談会を企画したり、会ってみたい大先輩に取材を申込み、記事にすることもできます。

★編集作業（発行二カ月前）

編集担当三名の部会員が集まり、執筆していただいた原稿を紙面に落としこんでいきます。パソコン操作について互いに教え合いながら作業しています。そこで覚えたワードの技術は仕事でも活かせる。

★校正作業（発行一カ月半前）

レイアウトに落としこんだ原稿を二人ずつ三、四組の校正担当が確認します。全体の校正内容を確認する二次校正の担当もいます。

★最終編集作業

部員の中には挿絵担当もいます。テーマに合わせて書いたイラストを最終レイアウトにまとめます。

★印刷会社へ入稿（発行一カ月前）

部会長が最終的にチェックした原稿を印刷会社へ入稿します。

★発送作業（発行一週間前）

出来上がった「点と線」研修案内などの同封書類を封詰めします。十名ほどで作業をしますが、三、四時間かかります。部会員以外の

方も参加します。封詰めをしながら、仕事や趣味の話など会話を楽しみながら作業をしています。

活動場所は、柏になります。広報部会には、幅広く学びあえる時間があります。関心を持っていただけの方は事務局へご一報ください。



日本社会福祉士会 全国大会レポート

これは、基調講演「これからの福祉実践への架け橋」神奈川県立保健福祉大学名誉学長 阿部志郎先生の話聞いて、しびれた三人組からの報告です。

演台にただの一枚の原稿もない、一時間の講演が終わった。

宮間恵美子（当会副会長）の頭にリフレインされる「着眼大局・着手小局で物事をすすめる」というひとこと。自分の日常の大風呂敷を広げた、とっちらかった取り組みを一刀両断された言葉と感じていた。

ソーシャルワーカーとして、
一・情報収集を丹念に行い、生活レベル、地域レベルまで視野を広げて利用者さんと一緒に「今」を捉えることの大切さ。
同時に、

二・課題解決は、地道にコツコツ

が大事。

三・課題↓目標↓実践↓評価というサイクルをまわし、ひとつずつ利用者さんと課題を解決し、それを共感することの大切さ。これらを一言で表され、まっすぐ伝わってきた。阿部先生が研ぎ澄まされた実践をされてきたことが…。

「自分、何やってんの？」という自問自答が始まり、悶々とする中、「染野さん。頭冷やしてきていい？」と会場を抜け出す。

となりの染野貴寛（当会会長）は宮間恵美子が何かを告げて席を立った時、生返事のまま、今の今まで小さなお年寄りであることが信じられない阿部志郎先生が放った、飛んでくるソーシャルワーカーの魂玉を必死にすくい続けていた。しかし、これまでの自戒なのか、未来への希望なのか、頭の整理はつかないままだ。

ぼんやりと映像が浮かび上がる。

一人という「概念」。日本のお城は最高権力者である「お殿様」を守り、石を積み重ね「お堀」を作り、その外側で「民衆」が暮らしていた。西洋のお城は民衆の「生」を護る作りになっている。個人に対して私たちが向き合うことに全力をささげつつ、社会や地域に長い歴史や文化の積み重ねた今があることを知る。私たちは感性も磨き続ける必要がある。魂玉はすでに降壇した舞台の周囲を駆け回るように、染野に語りかける。「実践は次に続く人へつないでいかなければならない。」

「俺は全然出来てないじゃないか」とつぶやき、我に帰る。恥ずかしさで身体が固まる…。翻弄される感情をどうやりくりしているやらわからずにいると、宮間に続いて、山崎泰介（当会元会長）も席を立つところだった。山崎の左目が妙だ。軽く驚く。感情的だが、涙は見たことがないし、左目からのだけの涙は妙だから。

「あなた方は、社会福祉士という名前にあぐらをかいてはいませんか。」

衝撃の幕開けだった。言葉が鈍器のように頭上から全身に振り下ろされた。穏やかで小さなお年寄りのはずの阿部志郎先生が、巨大な不動明王のように、わたしたちの先頭に立ち「社会福祉士なら、ソーシャルワーカーなら、弱い人のために発言しろ、戦え」とあの有名な絵画の中の「自由」を象徴した女性のように、旗を持ち先導しているように感じた。

話しは続く。「軍国少年だった自分に欠けていたこと」「その名がついた発達障害の類型を定義した小児科医の自宅には研究書はなく（もちろん仕事場には山積みだったそうだ）、芸術書ばかりであったこと」そして、「専門的知識だけでは、柔軟な思考で課題を解決できない。感性を上げなさい。」

降壇された我々の旗印が舞台袖

お悔やみ

に消えた後、左目が霞んでいることに気づいた。自分の非力を思い知らされていた。市井の人の中に身を置きたかった。彼らからも一度学ぼうと誓っていた。

数秒前に視界から消えた宮間の後を追うように、会場をでる。数歩遅れて、染野が後から来る気配を感じる。黙って歩き続け、建物から出た。低く垂れ込めた北陸の雲の下、泣き笑いのような顔の宮間に右手を挙げた。振り向くと染野も半泣きだ。市井の人に紛れるように、並んで歩く。宮間のとなり、見えないが阿部志郎の気配を感じる。その阿部に促されるように、古いのれんをくぐる。すると、阿部の気配が消える。同時に空耳のように聞こえる声。「市井の人たちから、ここから学び直さない。」三人はカウンターの向こうにいる「師匠」に注文を告げた。

二〇一五年九月三日、千葉県社会福祉士会の初代会長 坂下光男様のご逝去されました。

当会が産声を上げた一九九三年に設立準備委員から会長に就任され、翌年の当会ニュース『点と線』では「小さな泉のいくつかが次第に集まって、いつかそれが小さな流れになり、次第に大きな流れになるように、我々はまだ人数も僅かで力もないかもしれませんが、それぞれの持ち場で国民の福祉増進に微力でも力を尽くしていきたいと念願しています」といったメッセージを書かれていらつしやいました。我等の職の未来を信じていた方です。八六歳で逝かれた坂下さんが、今の私たち社会福祉士をどう見ていらつしやったのでしょうか。「まあ一生懸命やることだよ」と、笑顔とお言葉が目の前に現れるような錯覚を起こすほど、失礼ながら素敵な方でした。

坂下さんをととても尊敬していらつしやる愛娘様のお話では、ご自宅でご家族にお仕事のお話をされることはあまりなかったそうです。坂下さんと職場を共にした城戸さんの話では、いつでも目の前の課題から逃げず、向き合い、そしてエネルギーに越えていくソーシャルワーカーでいらしたそうです。身近にいらつしやったお二人のお話からも、同職の私どもが修するべき態度を残してくださいました。

坂下さん、私たち千葉県社会福祉士会は未来に向けて、つなぎささえまもり貫ける社会福祉士を養成し、集い、そして大きな流れを提供できるように一生懸命やってみます。

どうぞ、ソーシャルダンスの合間に私たちの歩みが正しいかどうか、見守ってください。

そして、心よりありがとうございました。

いつまでも、いつまでもお元気で叱咤くださるものと思っております。

深く感謝するとともに、在りし日のお姿とご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

二〇一五年九月七日
一般社団法人千葉県社会福祉士会
会長 染野貴寛



事務局便り

朝夕冷え込む季節になりました。研修の秋、皆様いかがお過ごしでしょうか。
風邪やインフルエンザなど召しませぬよう、お身体ご自愛くださいませ。

研 修 等 ・ 行 事 の お 知 ら せ

○平成 27 年 10 月 17 日（土）（終了）、12 月 19 日、1 月 23 日、2 月 20 日 ばあとなあサポート開催予定

○平成 28 年 3 月 5 日（土）平成 27 年度第 1 回臨時総会

※研修等が新たに決定した際にはホームページに随時掲載致します。是非チェックしてください。

千葉県社会福祉士会ホームページ：<http://www.cswchiba.com/>

はじめまして！

＊＊ 新事務局員 2 名のご紹介 ＊＊

「今年 7 月より事務局に入りました川井と申します。経理・総務として長く働いてまいりましたが、福祉との関わりは初めてです。皆様の活動を支えていけるよう、一助となれるように頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します！」

「今年 9 月より事務局に入りました、村上です。福祉関係の仕事は初めてですが、一日も早く会員の皆様のサポートが出来る様に元気に頑張ります！」

ようこそ！千葉県社会福祉士会へ

氏名	居住地	勤務先	氏名	居住地	勤務先
岸 玲子	八千代市		石井 章仁	浦安市	学校法人 千葉明德短期大学
別所 広美	館山市	館山市役所	鶴岡 裕美	千葉市	
益山 篤子	柏市		河内 真弘	松戸市	NPO 法人 エス・エス・エス千葉支部
日高 達予		社会福祉法人 讃寿会 小規模多機能ホーム かすが苑	矢野 菜穂子	市川市	原町成年寮
佐藤 秀子	船橋市		徳永 和子		社会福祉法人 まつど育成会
富野 浩司	我孫子市	NPO 法人 わごころ	小島 秀也	佐倉市	千葉第一法律事務所
俵 はるみ	流山市		樺山 一成	千葉市	
大倉 晴子			葛岡 俊枝	千葉市	居宅介護支援事業所 恵光園
三浦 健	船橋市	社会福祉法人 南台五光福祉協会 やまぶき園	稲葉 明美	野田市	
竹村 葉子	浦安市	あさりケアプランセンター	増田 みずゝ	千葉市	社会福祉法人 春陽会
田代 洋一		NPO 法人 たすけあいサポートアイアイ	玉村 公樹	松戸市	
木崎 吉男	松戸市		前田 千佳子	市原市	幕張テクノガーデン
木内 享		鎌ヶ谷市役所	楠 昌欣	銚子市	島田総合病院
高橋 宏之	千葉市		石野 誠	船橋市	ディアフレンズ美浜
糸瀬 悦子	千葉市	市川市役所	國保 静子	千葉市	
小川 知美	船橋市	障害福祉サービス事業所ベルサポ	山極 涼太		
井上 幸子	富里市	介護老人保健施設 セントアンナナーシングホーム	大塚 延男	印西市	
佐藤 滋洋	市原市	社会福祉法人 千葉市手をつなぐ育成会		松戸市	
上村 由香	千葉市	オリックスケアプランセンター	山口 航	船橋市	
塚越 俊輔		社会福祉法人 八街社会福祉協議会			

※正会員登録書「点と線掲載の可否」の項目で、可に○を頂いている方のみ掲載しております。（順不同・敬称省略）

平成 27 年 9 月末現在の会員数

正会員 1,378 名、 準会員 4 名、 賛助会員 2 名 合計 1,384 名